



2024 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【北海道支部】 2024(令和6)年8月31日

／北見工業大学

2024 年度第 2 回支部集会【北海道支部】

主催：公益社団法人日本語教育学会

共催：北見工業大学

- 日 時：2024 年 8 月 31 日(土)13:30～17:00 (受付開始 13:00)
- 会 場：北見工業大学(〒090-8507 北海道北見市公園町 165 番地)
- アクセス：女満別空港から連絡バスを利用して 40 分、「工業大学入口」で下車
JR 北見駅からバスを利用して 10 分(「工業大学入口」、「工業大学」、「工業大学正門」で下車) <https://www.kitami-it.ac.jp/>
- 参加費：500 円(マイページより事前参加登録時に支払い) 定員：50 名
- 対 象：日本語教育に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。
- 申込締切：2024 年 8 月 23 日(金)23:59 (定員に達した場合は、締切日以前に締め切ります。
会場に余裕があれば当日参加も受け付けます)
- 申込方法：[日本語教育学会マイページ](#) から事前参加登録をお願いいたします。
- 問 合 先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会
E-mail: shibu@nkg.or.jp TEL: 03-3262-4291(平日 9～18 時のみ)

◆支部集会日程◆

13:00	受付開始	【1 階 アトリウム】
13:25-13:30	開会挨拶	【1 階 アトリウム】
13:30-16:00	講演・意見交換会 「変わりゆく外国人労働者の受入れ制度と北海道のいま」 オホーツク地域の技能実習生について	【1 階 A102 室】
16:00-17:30	ポスター発表(1 件)・交流ひろば(6 件)	【1 階 アトリウム】
17:30-17:35	閉会挨拶	【1 階 アトリウム】

開会挨拶

【13:25-13:30／1 階アトリウム】

講演・意見交換会

【13:30-16:00／1 階 A102 室】

【講演】 13:30-14:30

「変わりゆく外国人労働者の受入れ制度と北海道のいま」

北海学園大学 経済学部教授 宮入 隆氏

【発表・意見交換会】 14:30-16:00

オホーツク地域の技能実習生について

- ・技能実習生からの話
- ・実習生の日本語研修機関からの話

あけぼの成田国際研修センター 空 佐知子氏、熊澤 なおみ氏

- ・実習生の受入れ機関からの話

東亜総研(東亜人材・北見) 長澤 薫氏

ポスター発表

【16:00-17:30 / 1階 アトリウム】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。

- ① 「わかりやすさ」を意識した中級レベル日本語学習者の口頭発表に
対する日本語母語話者の評価実態
永射紀子(国際医療福祉大学)

交流ひろば

【16:00-17:30 1階 / アトリウム】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。「交流ひろば」への出展は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

- ① **筑波大学 日本語・日本事情遠隔教育拠点の紹介** **【1階 アトリウム】**
伊藤秀明(筑波大学)

筑波大学 日本語・日本事情遠隔教育拠点では、日本語教育のための学習コンテンツやツールを公開しています。2023年度に公開したコンテンツの使い方の紹介を中心に、現場での活用法や今後の協力などについて一緒に考えていきたいと考えています。使い方を知りたいなども含めて興味のある方はぜひお越しください。

- ② **日本語中級レベルの大学院留学生の就職** **【1階 アトリウム】**
ー就職活動経験者2名へのインタビューからー
石川朋子・山路奈保子・上野まり子(九州工業大学)

中級レベルの日本語能力で就職活動を経験した大学院留学生2名に対して行ったインタビュー調査について報告します。日本語学習者に対する就職支援は上級レベル向けであることが多いですが、中級レベルで日本での就業を望む者にどのような指導が可能か、今回の調査対象者の回答を参考にみなさんと一緒に考えたいと思います。

③ 日本語学習者のジグソー学習時の相互行為 **【1階 アトリウム】**

濱多風子(北海道大学)

ジグソー学習時の相互行為を研究しています。ジグソー法とはアクティブラーニングの一形態です。学習者同士の会話を分析し、意見変容のプロセスと学習者間の日本語のレベル差の影響を明らかにしたいと考えています。グループワーク、話し合い、アクティブラーニング等について関心のある方はぜひお越しください。

④ オホーツクに住む外国人への日本語支援(現場の実践活動紹介) **【1階 アトリウム】**

久保比呂美(北見工業大学)、伊藤悠紀子(「いろはの会」)他

オホーツクの外国人に対して日本語支援をしているグループの実践紹介です。他の地域で同じような活動をしている方々と、情報共有や意見交換ができれば嬉しいです。興味のある方はぜひお越しください。

⑤ 多読を促進する取り組みと多読授業 **【1階 アトリウム】**

長野真澄(岡山大学)

出展者は多読活動が日本語学習者に与える影響を検討しながら、多読授業の改善を目指しています。出展では、多読授業の実践を紹介するとともに、多読を促進するための取り組みやアセスメントの在り方について、意見交換ができればと考えています。皆様と多読について幅広くお話しできると嬉しいです。

⑥ 多様な日本語レベルの学生が参加する国際共修授業の設計 **【1階 アトリウム】**

今泉智子(山形大学)

日本語初級後半～上級レベルの留学生と国内学生を対象とした国際共修授業を実施しています。様々なレベルの日本語話者が、日本語でコミュニケーションすることを通して、異文化間能力を高めることを目的としています。初・中級レベルの留学生でも日本語で参加可能な共修授業の設計について、意見交換をしたいと思います。

閉会挨拶

【17:30-17:35/1階アトリウム】

「わかりやすさ」を意識した中級レベル日本語学習者の口頭発表に対する日本語母語話者の評価実態

永射紀子（国際医療福祉大学）

＜共同研究者＞南部みゆき（宮崎大学）

1. はじめに

日本語のコミュニケーション教育における日本語学習者の日本語への評価は、日本語教師などの専門家によるものが多い。一方、一般の日本人による評価に注目した「日本人評価研究」では、日本語母語話者が会話の当事者ではなく第三者として評価するものが多く、当事者である聞き手の立場で情報伝達が成功したかどうかを評価したものは限られている。日本語学習者の日本語を聞き手がどう受け止めるかを分析するとき、同じ日本語母語話者による評価であっても、評価の観点や立場・視点が異なる。そこで本研究では、一般の日本語母語話者である日本人学生に、第三者としてではなく、聞き手として日本語学習者の発表を聞いてもらい、それをどのように評価するのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本研究の位置付け

日本語学習者へのコミュニケーション教育では、彼らの言語能力上の問題点を分析し、それを困難な点として紹介するものが多かった（稲田ほか 2022）。また、教育に関しても、野田（2012）は「これまでの日本語教育は、コミュニケーション能力の育成を目的として掲げていても、実際には日本語の構造や体系を教えようとしている部分が多かった」と述べている。いずれも日本語学習者自身の問題点の解決や日本語の言語知識が注目されてきたことの表れである。これに対して、コミュニケーションには、話し手と聞き手の双方が理解の達成に関わっており、その観点に立つと、問題点の分析が必ずしも分析の正しい見方とは言えないとする研究がある（柳町ほか 2013）。コミュニケーションの目的が情報の伝達であるとするれば、情報の受け手である相手の存在は看過できないであろう。したがって、本研究においても、コミュニケーションの目的である情報伝達および相手の理解を重視し、日本語学習者の日本語を日本語母語話者がどのように受け取るのかに注目することにした。

コミュニケーションの相手としての日本語母語話者による評価に視線を転じると、日本語の授業実践では、その授業を担当する教員が評価をする事例がほとんどである。これは、前述したような困難点や日本語の構造や体系に注目できる点で、専門的な知識を有することは適していると考えられる。一方、実際のコミュニケーションにおいては、日本語教師が相手となることは稀で、日常会話だけではなく、大学における学修でも一般の日本語母語話者が相手となるものがほとんどである。つまり、日本語指導のためには日本語教師による評価が必要だが、コミュニケーション能力を問う際は一般の日本語母語話者による受け止め方を分析する必要がある。

一般の日本語母語話者による評価に関しては、日本人評価研究という枠組みでの研究がある。

日本人評価研究とは、「日本語学習者の日本語運用に対して日本語母語話者が何に注目しどのように評価するかを明らかにする研究」(小林 2000)である。この分野の研究では、日本語教師と一般日本人の評価のズレについての研究が充実している(小池 1998, 小池ほか 1998, 原田 1998, 小池 2004 など)。ただし、これらの日本語母語話者による評価は、会話の第三者によるものがほとんどで、コミュニケーション相手の当事者が直接評価したものではない点で、本研究が目標とする情報の受け手の理解を得られたかどうかは明確ではない。また、日本人評価研究が会話全体を分析対象とするのに対し、本研究では、日本語学習者による理解可能な情報の伝達と、それを受ける日本語母語話者の相互作用に注目している。

この理解可能な情報の伝達に必要なのが、日本語の言語知識や運用力のほかに論理的思考力であると言われている。具体的には、何を話すか、どのような構成で組み立てるか筋道を立てて考え、それを的確に表現する力であると述べられている(古賀・青木 2012)。つまり、自分が何を言いたいのかははっきりさせること(主張を明確にすること)、話の内容に関連性を持たせること(結束性を持たせること)などが話し手に求められるほか、その時の文脈や背景知識などが受け手の理解に影響すると言われている(松尾 1999)。そのため日本語学習者は、主張の明確化や結束性のほかに、その場の状況を正確に伝えるための具体的な説明を相手に提供する必要があるといえるだろう。

本研究では、相手である日本語母語話者に理解可能な情報を提供するため、日本語学習者には発表前の原稿を、「主張の明確さ」や「話の内容の関連性」といった「わかりやすさ」に関連する項目を含んだチェックリストで確認を促した。そのうえでプレゼンテーションを行い、日本語母語話者がその内容をどのように受け止めたのかを、記述アンケートにより明らかにし、一般の日本語母語話者がコミュニケーションとしての日本語学習者の日本語をどのように捉えるかを明確にすることとした。

3. 分析データと分析方法

本研究の対象は、A大学の医学部1年の日本人学生(以下、日本語母語話者)12名である。彼らが参加したのは、B大学の医学部1年の留学生(以下、日本語学習者)とのオンライン交流授業(zoom, 全2回)である。交流授業では、事前学習として日本語学習者がプロジェクトワークを行い、そこでまとめた情報を口頭発表することとした。発表をする日本語学習者は15名で、発表内容の準備段階に「聞き手にわかりやすく」ということを口頭で指導をしている。このような意識づけのほかにも、完成した発表原稿のチェックリストでは、①文章のわかりやすさに関する項目、②文脈のわかりやすさに関する項目、③主張、論点の明確さに関する項目を確認している。日本語学習者は、作成した原稿を基に発表前リハーサルを行い交流授業に臨んでいる。これに対し日本語母語話者には、発表を「わかりやすさ」の観点から評価してもらった。「わかりやすさ」を観点に用いた理由は、まずコミュニケーションにより伝達された情報や内容がわかるかに注目してもらうためである。これは認知心理学的な立場から見たコミュニケーションの定義が「伝達すること」であり、その伝達内容がきちんと相手に伝わり、さらに相手がそれを理解できることがコミュニケーションの成立(松尾 1999)と考えたからである。評価方法は、質問紙による5段階評価および記述による評価の2つである。前者は発表を聞きながら「立場や視点」、「テーマに対する主張」、

「結論とその根拠」が明確であるかを5段階で評価するもの、後者はそのすぐ後に「発表に対する気づき(感想)」をGoogleフォームに記述したものである。ここで、本研究の目的が、聞き手の実際の受け止め方を分析することであるため、分析では後者の記述回答を採用した。収集した記述回答は、KH Coderを用いて特徴語のリスト、および共起ネットワークを用いて分析した。

4. 結果と考察

分析の結果、内容に関することは高い割合で好意的に評価しており、否定的な評価はほとんどないことがわかった。日本語母語話者による評価の傾向を探るため、特徴語の前後の文脈(内容)をKWICコンコーダンスで確認したところ、日本語学習者の発表に何か疑問を持った場合でも、文脈等から積極的に推測し理解につなげている様子がうかがえた。また問題を指摘するのではなく、改善点として言及する場合があります、全般的には問題として意識しない傾向にあることが明らかになった。これは日本人評価研究でも「一般の日本人は学習者の悪かった点よりも良かった点に目を向ける傾向がある」(原田1998)と述べられており、中級レベルの日本語学習者に対し寛容な評価をしたものと考えられる。一方で、「わかりにくい」や「聞き取りにくい」などの言葉も評価に表れており、それらの殆どが発音に関する事柄に集中していた。具体的に指摘された内容は「しょ」の音、小さい「や」の発音など、かなり微細であることがわかった。小林(2000)によると、一般日本人による評価の特徴に「アクセント・イントネーションの不自然さはマイナス評価と関係しない」があるものの、一方で「注目しやすい項目とそうでない項目がある」という特徴も挙げられていた。本研究において発音への指摘が見られたのは、後者の特徴が評価に表れたものではないかと考える。

5. おわりに

本研究では、コミュニケーションの相手へわかりやすく伝えることを目標にした日本語学習者によるプレゼンテーションを、情報の受け手である日本語母語話者が、その内容理解についてどのように評価したかを、2回のアンケート記述を用いて、特徴的な語およびその語の前後の記述内容から明らかにした。その結果、日本語母語話者は日本語学習者に対し問題点を指摘するよりもむしろ意識しない傾向にあり、一部発音に関すること以外はおおむね好意的に評価していることがわかった。このことから、彼らのコミュニケーションが、一部不完全ながらもある程度成立したと考えられる。そもそもコミュニケーション自体が完全な成立を目指しているわけではないことは、松見(1999)でも述べられていることから、コミュニケーション能力の育成を考える場合には、相手とのやり取りを通して、いかに話し手の意図を伝達できるようになるかに注目していくべきではないだろうか。今後は、コミュニケーションを行う者同士の相互行為にさらに注目して研究を進めていきたい。

付記：本研究は、JSPS 科研費 JP22K00643 の助成を受けている。

参考文献

- (1) 稲田朋晃・品川なぎさ・吉田素文 (2022) 「医学部留学生が臨床実習時に感じたコミュニケーション上の困難点」『医学教育』53(1), pp.65-69.
- (2) 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれー初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価ー」『北海道大学留学生センター紀要』2, pp.138-156.
- (3) 小池真理 (2004) 「日本語母語話者は第二言語話者との会話をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』7, pp.16-33.
- (4) 古賀万紀子・青木優子 (2012) 「論理的表現力育成のためのスピーチ指導ー韓国人中級日本語学習者を対象にー」『早稲田日本語教育学』11, pp.135-153.
- (5) 小林ミナ (2000) 「『何を』教えるのかの再吟味へー日本人評価研究の意義と限界ー」『北海道大学留学生センター紀要』4, pp.149-159.
- (6) 野田尚史 (2012) 「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」野田尚史 (編) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, pp.1-20.
- (7) 原田明子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』2, pp.157-168.
- (8) 松尾太加志 (1999) 「第1章 コミュニケーションとは」『コミュニケーションの心理学：認知心理学・社会心理学・認知工学からのアプローチ』ナカニシヤ出版, pp.1-26.
- (9) 松見法男 (2010) 「第3章 言語的コミュニケーションの心理学」海保博之 (編) 他『朝倉実践心理学講座 5 わかりやすさとコミュニケーションの心理学』朝倉書店, pp. 41-61.
- (10) 柳町智治・長野克則・繪内正道・馬場直志 (2013) 「外国人留学生による日本語コミュニケーションにおける問題点と改善策」『工学教育』61-4, pp.3-7.

**公益社団法人日本語教育学会
支部活動委員会**

委員長：國澤里美

副委員長：塩井実香・嶋ちはる・鈴木崇夫

新城直樹・犬飼康弘・井上里鶴

内田さつき・神山英子・木林理恵

草木美智子・久保比呂美・高橋亜紀子

弓田美有紀・田中真寿美・中東靖恵

平田未季・深川美帆・松尾憲暁

元木佳江・薮崎淳子・山本裕子

審査・運営協力員

浅津嘉之・葦原恭子・李澤熊

今西利之・植松容子・加藤恵梨

鴈野恵・衣川隆生・近藤行人

齋藤ひろみ・住田哲郎・野田尚史

吹原豊・真嶋潤子・松永典子

山根（吉長）智恵・山元一晃

**公益社団法人日本語教育学会
2024年度第2回支部集会【北海道支部】予稿集**

発行 2024年7月22日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <https://www.nkg.or.jp>